

機関番号：15501

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20500547

研究課題名(和文) 国際学術ジャーナルにみるスポーツ史研究の地平に関する研究 1990-2010-

研究課題名(英文) An Analysis of the Trend in Methodologies for Sport History in International Journals (1990-2010-).

研究代表者

池田 恵子 (IKEDA KEIKO)

山口大学・教育学部・准教授

研究者番号：10273830

研究成果の概要(和文)：現在のスポーツを取り巻く状況が、一国のナショナリズムや地域研究の柱からでは集約不能の関係性の学として存立していることを国際ジャーナルにみられる方法論の分析を通じて実証し、その方法論的志向性とマルチチュードとの関係を総括した。

研究成果の概要(英文)：The present situation of the study for sport history shows that sports should be explained not only as the issues of regional history or nationalism in each country but as related issues to a wider globalized cultural context. That was proved through an analysis of the methodologies in international journals during last two decades: 1990-2010. This study summarized the tendency and considered the associated concept of 'multitude'.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度	0	0	0
年度	0	0	0
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：体育・スポーツ史

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・スポーツ科学

キーワード：体育史、スポーツ史、国際ジャーナル、西洋史

1. 研究開始当初の背景

(1) ベルリンの壁の崩壊以後の国際社会は一国家またはある国家集団の政治的力学によって説明できないあらたな多元的関係性の中にある。この多元的なダイナミズムについて、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、世界は異なる経済圏あるいは主権国家どうしの闘争という、第一・二次世界大戦の原理であった帝国主義戦争の力学とは異なる多様性(マルチチュード)の「生政治的生産」の中で、多くの問題も再考される時代になったと主張している。同時に戦争についても、「身体が存在しな

い戦争」として、生権力と政治との癒着や、ハイテク戦争の対岸としてのテロリズムを指摘する。これにより、スポーツと戦争を問題にしてきた体育・スポーツ史も、地球規模で問い直されている関係の学を取り込む必要性が生じている。従来の秩序を超越しつつも、近代をも含みこむこの多元的視角は、これまで未解決であった社会構造のメカニズムに対しても、より明晰さを提示しているように思われる。

(2) 第二に、1990年代以降、加速した体育・スポーツ史のテーマの細分化は、総説の構築に共通認識を欠く状況を生んだ。このこ

とは、1. において述べた「マルチチュード」として指摘される多元的現象と一致している。北米スポーツ史学会 (NASH) 刊行物 *Journal of Sports History* は、北米地域の問題を超え、地球上のあらゆる場所で生じているスポーツの問題を扱う国際誌として機能し始めた。さらに英国を中心に刊行されてきた学術雑誌 *BJSH (The British Journal of Sports History)* も大英帝国主義とスポーツの問題を扱って以来、植民地の問題から派生する覇権国家と従属国家、あるいはグローバリズムとローカル・アイデンティティに関する論文が増加し、事実上、アジアを含めた世界の多くの地域のスポーツの問題を含むようになり、対象地域は拡大した。これに伴い、学術誌の名称も *IJHS (The International Journal of History of Sport)* へと改名された。

- (3) 第三に、日本やオーストラリアのスポーツ史学会刊行物は、それぞれ独自の展開を遂げた。BSSH 英国スポーツ史学会は、学会誌 *Sport in History* (-2003 年まで *The Sports Historian*) を通して、国内外の話題を充実させ、1990 年代以降の細分化されたトピックの発展状況を映してもいた。こうした中、国際的なシンポジウムのテーマを模索するにあたり、所与の国際的視野、地球規模で議論されるべき方向性、共有される今日的課題にとっていかなるメソロジーが有効であるのかの検証が必要となった。

2. 研究の目的

そこで、1990 年から現在まで刊行されたスポーツ史研究に関する国際学術ジャーナルを対象とし、この 20 年間に於ける方法論的特性の傾向・推移の分析を本研究の目的に掲げた。その際、分析視角を検証するために、仮説として、次の 7 項目を設定した。この 7 項目は、英国を対象とした予備調査の結果、得たものである。I マルクス主義的階級史観、II 帝国主義またはローカル・スタディーズ、III ジェンダー、ポストモダニズム、IV アントニオ・グラムシの言う「ヘゲモニー」論、微細な権力、M・フーコー的視座またはそれらへの批判的見解、V 社会文化史・文化論的転回 (カルチュラル・ターンの意識・(ピーター・パーク的カルチュラル・ヒストリーにおける「ハイブリッド・ジャンル」)、ル・プレザンタシオン (表象) およびリンギスティック・ターンの (言語論的転回) の援用、VI 総説 (グラント・セオリー、ビッグ・アイデア) に関わる研究、VII その他である。同時に、先に述べたネグリやハートらが主張する「マルチチュード」の観点の反映の有無にも注視する。対象とする国際誌

は、NASH 北米スポーツ史学会学術刊行物 *Journal of Sports History*、元々英国で発刊されていた *BJSH (The British Journal of Sports History)* から改名した国際誌、*IJHS (The International Journal of History of Sport)*、英国スポーツ史学会監修、*Sport in History* (2003 年に *The Sports Historian* から改名) などである。現在のスポーツを取り巻く状況が、一国のナショナリズムや地域研究の柱からでは集約不能の関係性の学として存立していることを実証し、その方法論的志向性とマルチチュードとの関係を総括する。

3. 研究の方法

すでに、イギリスにおける過去 20 年間の推移について予備調査を行い、上述した 7 つの分析視角を設定した。またオーストラリアにおけるスポーツ史研究の動向については、幾つかの個別論文を除き、日本国内ではほとんど体系的な情報を欠いていた。大英帝国主義とオーストラリアのスポーツについて論じている Wray Vamplew と Brian Stoddart らによる *Sport in Australia* (1995 年) の刊行はこの領域に刺激を与えた。1983 年に発足していたオーストラリア・スポーツ史学会 ASSH (the Australian Society for Sports History) は、その後、オーストラリアの側からの視点をより深く探究するに至り、オーストラリアン・ルールズ・フットボールなどを例にあげ、“Our Own Sports” と表現するなど、帝国主義スポーツ史研究を超えた新たな段階を迎えた。ASSH は、こうした自国独自の伝統に基づくスポーツの発展を意識させる学術雑誌名、*Sporting Traditions: Journal of the Australian Society for Sports History* を刊行している。そこで、本研究では試みとして、国際学術ジャーナルの性格を有する学術雑誌、および英語による学術雑誌の分析に限定した。詳細は以下の通りである。

【分析対象としたジャーナル】

- ◆ *Journal of Sports History*
- ◆ *The International Journal of History of Sport*
- ◆ *Sport in History* (-2003: *The Sports Historian*)
- ◆ *Sporting Traditions*
- ◆ *ISHPES STUDIES* (国際体育スポーツ史学会学術刊行物)

【7 項目からなる分析視角】

本研究は次の 7 項目を分析視角として設定し、マルチチュードとの関係も考察する。

- I マルクス主義的階級史観を基礎に据えるもの
- II 帝国主義・ローカル・スタディーズ
- III ジェンダー、ポストモダニズム
- IV アントニオ・グラムシの「ヘゲモニー」、微細な権力、M・フーコーの視座を意識するもの・およびそれへの批判的見解
- V 社会文化史・文化論的転回（カルチュラル・ターン）を意識するもの（ピーター・バーク的カルチュラル・ヒストリーにおける「ハイブリッド・ジャンル」、ル・プレザンタシオン（表象）およびリンギスティック・ターン（言語論的転回）の援用
- VI 総説（グラント・セオリー、ビッグ・アイデア）に関わる研究
- VII その他

4. 研究成果

【ジャーナル分析と併行した国際的議論の動向】

平成20年度は、*IJHS: The International Journal of the History of Sport* (Routledge, UK) 及び *Sport in History* (Routledge, UK) にみられたテーマ分析を行うと同時に、幾つかの研究書の書評を国際ジャーナルに投稿した。関連する成果発表として7月に The 9th ISHPES Seminar, International Society for History of Physical Education and Sports (Tartu, Estonia)、12月に ACES Conference 2008: Asian Council of Exercise and Sports Science (Taipei, 台湾) において個別発表を行っている。平成21年度は、この20年間の国際的なスポーツ史研究の研究動向の整理を試みるために、8月開催の日本体育学会第60回大会（広島）における体育史専門分科会企画として国際シンポジウムを企画・提案した。シンポジウムは、日本体育学会体育史専門分科会が2名の英国人研究者を招聘し、「体育・スポーツ史研究の20年を振り返る—方法論と個別研究 Since 1989—」と題するシンポジウムのコーディネーターを務めた。招聘した2名の著名な英国の研究者、リチャード・ホルト氏およびジェフリー・ヒル氏の論文を翻訳し、シンポジウム趣旨解説および「まとめ」の執筆を担当し、これらはすべて『体育史研究』27号に掲載された。また同号掲載の英国人研究者、ニール・カーター氏に依頼し、寄稿された特別寄稿論文の翻訳も担当し、同号に掲載された。

さらに、*IJHS*『国際スポーツ史研究』に、分析項目のひとつであるジェンダーに関す

る総説の必要性を主張し、日本のケーススタディーとして自らも投稿し、2010年度3月号に掲載された。

英国における研究動向については、「英国スポーツ史研究の潮流—30年間の歩み—」として投稿し、『西洋史学』235号（2009年12月、58-69頁）に掲載された。また初年度12月にアジアスポーツ運動科学会議において招待講演を行った論文についても“The Body from the Perspective of the Historical Phase in Society” Michael Chia and Jasson Chiang eds., *Sport Science in the East: Issues, Reflections and Emergent Solutions*, World Scientific Publishing Co., Singapore and USA, 2010, pp.219-230として刊行された

最終年度は、対象期間における国際誌にみられた方法論の推移・傾向についてまとめ、そうした分析を通じて、日本における体育・スポーツ史研究が国際的視野からどのように位置づけられるのか、その位相を捉えた。特に、昨年9月に英国ドゥ・モンフォート大学国際スポーツ史・文化研究所（ICSHC）より招聘を受け、平成22年5月から11月末日までの7ヶ月間、ICSHCにて本研究を実施できることとなったため、国際的な方法論の傾向分析を、ICSHCにて開催された各種のセミナーに参加することで得た知見からも補完した。とりわけ、「多元的視角の進行そのもの」がグラントセオリーの探求および構築（関係力学の説明）に寄与することを学んだ。加えて、上記の研究所では、必要な学術雑誌論文の翻訳を行い、日本で重視されている研究視角との相違を明らかにするために、9月8日に日英比較スポーツ史研究セミナー Japanese Reflections on the History of Sport (One-day Symposium Wednesday 8 September 2010) を提案し、開催された (Organised by the International Centre for Sport History and Culture, De Montfort University, Leicester)。本セミナーは在英日本大使館を経由した学術情報としても配信され、英国のレスターのみならず、近隣の大学、ドイツからも研究者が参加した。このセミナーは日本におけるスポーツ史研究が、国際的なスポーツ史研究の地平にいかなる意味を放っているものであるかを検証するために実施したが、結果、単なる地域研究ではなく、国際的地平からスポーツ史研究の現在をグローバルな関係性の中で捉えるべき必然性を確認した。具体的には、日本と英国との外交史そのものが、日本史であり、かつ英国史であるという理解である。これまでは、日本スポーツ史としてのみの脈絡、あるいは英国史流の脈絡（ほとんどなされていない）で捉えられていたことが問題であった。さらに、セミナーを通じて、ドイツと日本におけ

るファシズム関係史構築の可能性についても在英のドイツ人研究者より提案がなされた。本提案は、昨年公表した研究者の原著論文、「Ryōsai-kembo’, ‘Liberal Education’ and Maternal Feminism under Fascism : Women and Sports in Modern Japan.”, *The International Journal of the History of Sport* (March 2010), pp. 537-552. において、女性スポーツ史とファシズムの問題は、イタリア・ドイツ・日本における枢軸国共通の傾向分析としてまとめる必要があると述べた提案に一致している。9月11日にはロンドンで開催の英国スポーツ史学会においても報告を行った。9月以降は、この間の成果をまとめ、論文の作成に専念し、帰国後、1月にびわこ成蹊スポーツ大学セミナーハウスにて、9月開催の日英比較セミナーの報告を行い、3月19日には、京都大学文学部にて、英国スポーツ史学会にて公表した論文について報告を行うなど、日本国内においても成果報告を行った。

以上が、ジャーナル分析と併行させた補足分析である。これらはジャーナルに掲載されたトピックの分類を通じてのみでは鮮明にならない部分を検証および補完するための試みであったが、上記により得た知見は、以下に示す定量的なジャーナル分析の結果をより確証づける結果となった。

【ジャーナルの定量分析】

5つのジャーナルにみられた論文の方法論的特性を7つの観点からカテゴライズしたが、こうした分析を行う上で、まずは問題点を明確にしておきたい。対象としたジャーナルは、バックナンバーを取り寄せ、すべて入手したが、すでに事務局に在庫が存在しないものもあり、欠落号も生じている。また、巻号ごとの論文数、ページ数は、一定ではないため、各巻号の論文において採用された方法論の数に関する純粋比較は元より成立しない。加えて、同じジャーナルにおいても、巻号ごとの論文数やテーマ数も年次、巻号ごとに異なっている。さらに、歴史論文の性格上、主要な方法論としてカテゴリー化した項目が重複するテーマも相当数存在する。そのため、傾向分析は、数による評価ではなく、巻号ごとに扱われたテーマの複層性を考慮して重複カウントを行うこととし、あくまでも「ある」「ない」の傾向を捉え、その事実を表にプロットし、全容を示した。また、そもそも多元性の実証を仮説に掲げているため、「VII その他」の項目が多くなることが予想された。そこで、「VII その他」の欄には具体的なトピックを記載している。また先に述べたように、ジャーナルごとに、年間に刊行される号数は異なっており、特定のジャーナルに限定しても、寄稿者の増減に伴い、

ある年以降の刊行巻号数も変化しているため、異なるジャーナル間のテーマ数、論文数の比較は意味をもたないが、以上のことは定量的分析が無意味であることを示しているわけではない。あくまでも一定数以上の巻号を通して一定期間以上の傾向を把握するには有効である。以上のような問題はもとより想定のうちにあった。そのため、ジャーナルの定量分析のみに依存するのではなく、前項において、状況分析と併行させた。本研究は両者でセットであり、ジャーナルの傾向と、実際の国際シンポジウムでとり交わされた方法論上議論の趨勢の双方が結論を補完し合っている。また実験室による実験と異なり、歴史テーマの分析に、定量分析が、それほど馴染むものではないにもかかわらず、このような分析を採用した理由は、日本における体育・スポーツ史研究の方法論を捉える上で、その独自性を客観的に提示するものさしが必要であり、国際シンポジウムや国際学会に参加した者が国内にもたらす意見や提案のみでは、蓋然性としての信頼を得るに至らない点を、分析結果の位相として提示できるという意味で有効であり、こうしたメリットを優先した。

表の詳細は、Analysis of Journal Topics 1990-2010 として、エクセルファイルに入力したが、膨大な量を伴うため、以下にポイントのみを示しておきたい。

まず、総じて、結論づけられたことは、今日、世界のスポーツ史研究は、一国史の枠を超えた共通テーマに対し、さまざまな地域の文化的脈絡からのアプローチが有効とされていることである。いわゆる横断文化的な分析が主流となっている。一例を挙げれば、「オリンピック」や「都市のスポーツ」というテーマに対し、あらゆる時代、あらゆる国・地域からの接近が可能であり、さらに、メディア的表象、リングスティック・ターン（定訳：言語論的転回）、カルチュラル・ターン（定訳：文化論的転回）といった方法論も取り入れられている。そうした文化的脈絡を総じて、オリンピックとは何か都市型のスポーツということが明らかにされている。このことは、かつて一国史における閉じた議論では抑制せざるを得なかった共通の文化特性に迫れる可能性を導いている。すなわち、社会経済学的意味を超えて、サッカーとは何か。水泳とは何かといった現象学的な問いも思考される。もっとも、ケース・スタディーとしてのローカル・スタディーや各々の詳細な個別研究がその前提にあるため、それらが果たす意味もきわめて重要である。このことは、文化的脈絡の異なる個別研究であっても、共通言語で公表することにより（言語という固有

の文化的表現の深みこそ捨象されてしまうが)、文化特性の根本を考える上で示唆的な結論を導くことも可能である。そのためには、英語論文による研究成果の公表が必要とされる。特に *IJHS* に顕著にみられることであるが、ほとんど毎号において、特集テーマが設定され、かつて種々のテーマの論文の集合体であったジャーナルが、巻号ごとにテーマをもった研究論文集の役割へと移行している。これにより、地域・時代・政治的分析、方法論を意識的に集約し、特別編集号とすることで、その背景にあるテーマごとのグランドセオリーを導き出すことが可能になっている。投稿者が国・地域を超えて広がっていることがその理由にもあろう。*The International Journal of History of Sport* および *Sport in History* (-2003: *The Sports Historian*) において、この傾向は一層増加する傾向にある。ほとんど毎号が特集号の体裁をとるように移行しているといっても過言ではない。英語で刊行されることにより、よりグローバルな地域の寄稿者を抱える学術ジャーナルほどこの傾向が高いと言える。日本におけるジャーナルにおいては、寄稿数も少ないことから、テーマごとの総括ができる状況にはない。これはオーストラリアの学術雑誌と同様である。また、以上のことは、地域固有のテーマを離れ、ビッグアイデア、グランドセオリーの構築には、国際誌を利用することにメリットがあるといえる。もっとも、地域の状況を踏まえた克明かつ詳細な個別スタディーの充実が、出来事や史実の説明を支え、グランドセオリーを構築する上での大前提となっていることは言うまでもない。

また予期した通り、マルクス主義的階級史観に基づく分析は減少している。これに対し、ポストモダニズムおよびジェンダーに関するものは増加の傾向にある。さらにヘゲモニーや微細な権力による分析を方法論として主要に位置づけるというよりは、それらは研究手法の前提にすでに意識されたものとなっており、それらを欠いた植民地研究やローカル・スタディーないしは覇権国家との対比は存在し得ない。その意味で有効性を継続している。また帝国主義研究については、地図に照らして、これまで掘り起こされていなかった地域の問題を扱う際に、そうした手法に回帰している傾向もあり、その意味では、それらの後に続く関心としてのメディア的表象・文化論的転回を扱う研究が一層に盛んになされるようになってきている。マルチチュードが意味するよう、テーマの細分化、多角的なテーマの進行は、論じる共通認識の瓦解を

意味するのではなく、学術の深化による必然であり、研究者の側も、人種・信条・民族・地域・国籍を超え、共通のテーマが様々な角度から論じられる機会が増し、その多元的次元における論議を邁進させているという意味で、前進を意味している。分析結果は以上のことを気付かせるものであった。

各国における学会の果たす役割も、今後こうした経緯に沿う形で、変化していくことが予想される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 10 件)

- ① Keiko Ikeda, “‘Ryōsai-kembo’, ‘Liberal Education’ and Maternal Feminism under Fascism: Women and Sports in Modern Japan.”, *The International Journal of the History of Sport*, (vol. 27 No. 3, 2010), pp. 537-552. 査読有り
- ② 池田恵子、特別寄稿翻訳：ニール・カーター著「サデルからチャップマンまで—近代サッカーにおける監督の誕生—」“From Sudell to Chapman: The Birth of the Modern Football Manager”『体育史研究』第 27 号、61-67 頁 (2010) 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ③ 池田恵子、シンポジウム翻訳：ジェフリー・ヒル著「歴史とテキスト—言語決定主義の問題とは？」原題 “History and Text: a case of linguistic determinism?” 『体育史研究』第 27 号、105-114 頁。(2010) 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ④ 池田恵子、シンポジウム翻訳：リチャード・ホルト著「アマチュアリズムとイングリッシュ・ジェントルマン—スポーツ文化の分析—」原題 “Amateurism and the English Gentleman: the Anatomy of A Sporting Culture.” 『体育史研究』第 27 号、85-96 頁。(2010) 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ⑤ 池田恵子、シンポジウム趣旨解説前文：日本体育学会第 60 回記念大会体育史専門分科会シンポジウム企画「体育・スポーツ史研究の 20 年を振り返る～方法論と個別研究 Since 1989」『体育史研究』第 27 号、70-74 頁。(2010) 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ⑥ Keiko Ikeda, Book Reviews: Andreas Niehaus and Max Seinsch eds., *Olympic Japan: Ideals and Realities of*

(Inter)Nationalism, (Ergon Verlag, Würzburg, 2007), *The International Journal of the History of Sport*, Routledge, UK, volume26, No.1, 2009, pp. 130-132. 査読無し (編集委員会委託原稿)

- ⑦ Keiko Ikeda, “The Body from the Perspective of the Historical Phase in Society, in: Michael Chia, Jasson Chiang eds., *Sport Sciencs in the East: Issues, Reflections, Emergent Solutions*, World Scientific Publishing Co., Singapore & USA, 2009, pp. 219-230. 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ⑧ 池田恵子、研究動向:「英国スポーツ史研究の潮流—30年間の歩み—」『西洋史学』235号、2009年、58-69頁。査読有り
- ⑨ Keiko Ikeda, Book Reviews: Joseph Maguire and Masayoshi Nakayama, eds., *Japan, sport and society: tradition and change in a globalizing world* (London; New York: Routledge, 2006), *Sport in History*, Routledge, UK, Vol. 28, 2008, No. 4, pp. 643-647. 査読無し (編集委員会委託原稿)
- ⑩ 池田恵子、書評: 内海和雄著『アマチュアリズム論—差別なきスポーツ理念の探究へ』、『スポーツ社会学研究』16、(2008)、100-104頁。査読無し (編集委員会委託原稿)

[学会発表] (計6件)

- ① 池田恵子、「トム&ジェリーイズムとその音楽—音楽スポーツ史の試み (その2)」第235回近代社会史研究会、京都、京都大学文学部、2011年3月19日。
- ② Keiko Ikeda, “Pierce Egan’s ‘Tom-and-Jerryism’ and its Music: A Musical Sports History.”, BSSH: British Society of Sports History: Welcome Centre, London, UK, 11 September, 2010.
- ③ Keiko Ikeda, “The Body: A Historical Perspective.” Japanese Reflections on the History of Sport, One-day Symposium, Organised by the International Centre for Sport History and Culture, De Montfort University, Leicester, UK, 8 September, 2010.
- ④ Keiko Ikeda, “‘Ryōsai-kembo’, ‘Liberal Education’ and Maternal Feminism under Fascism :

Women and Sports in Modern Japan.”, BSSH: British Society of Sports History (jointed by BSSH 2009 & 10th ISHPES Congress): Stirling University, Scotland, UK, 4 September 2009.

- ⑤ Keiko Ikeda, Invited Presentation: “The Body from the Perspective of the Historical Phase in Society.” 2008 ACCESS Conference: Asian Council of Exercise and Sports Science, Cultural University, Taipei, 13 December 2008.
- ⑥ Keiko Ikeda, “Radicals and Sport: ‘Bully’s Acre’, John Egan and Pierce Egan’s *Boxiana*.”, 9th ISHPES Seminar (International Society for History of Physical Education and Sports), Tartu University, Tartu, Estonia, 5 July 2008.

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://ds0.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kikeda/curriculumvitae2.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

池田 恵子 (IKEDA KEIKO)
山口大学・教育学部・准教授
研究者番号: 20500547

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし